別紙１

《一般部門　最優秀賞》《読者選考委員賞》
「花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記～」

あらすじ

足利将軍家御用達の絵師集団「狩野工房」の次期棟梁である狩野源四郎（後の永徳）は、相棒の三左を連れて自由気ままに京の町へ繰り出しては、目の前の風景や出来事、人々の暮らしを絵に閉じ込めていく。ある時、源四郎は将軍から京のすべてが描かれた「京尽しの屏風」を描くよう命じられる。誰も見たことのない唯一無二の屏風を描くため、源四郎たちが日々奮闘する中、都を揺るがす大きな事件が起こる――戦国時代の京都を舞台に、大切な人との出会いや別れを通して、ありのままの京都を描き上げていく源四郎と三左の成長を描いた歴史小説。

作者プロフィール

おぎなお紺（おぎなおこん）＝ペンネーム＝

一九七一年、京都市生まれ。滋賀県在住。
佛教大学社会学部社会福祉学科卒業。
元滋賀県立特別支援学校教員。
二〇二三年、第一回青いスピン入選、二〇二四年、第二回京都キタ短編文学賞一般部門優秀賞、二〇二五年、第三回同最優秀賞受賞。

受賞コメント

狩野永徳の洛中洛外図屏風に本格的に出会ったのは、二年前。
お尻を出して焚き火にあたる男の子がいて、抱っこ紐に赤ちゃんをくるんだお母さんがいる。千本ゑんま堂では狂言が演じられ、先頭をゆく長刀鉾が切ったしめ縄までもが描かれている。四百年前と変わらない人々の営みと伝統に魅せられて、この絵を物語に閉じ込めたいと思いました。
執筆中は浮かれたように京都のあちこちを訪ね、空気を吸い、匂いを嗅ぎ、戦国時代の都を妄想。前世の私は狩野工房にいたのでは？　と思うほどにのめりこんだ時間は、とてもエキサイティングでした。
その物語が本になる。こんなに嬉しいことはありません。
審査員の皆様をはじめ、京都文学賞に関わってくださったすべての方に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

作品の一部抜粋

いつのまにか、山だけでなく空までもが、柿色に染まり始めていた。河原から吹く風が冷たく、酔って火照った身に心地よい。
「それにしても、源四郎」
公方さまが、切れ長の目を細める。
「先ほどはよう言うた。狩野を背負う男として、申し分ない言いっぷりだったな」
「じいさまの受け売りですよ」
源四郎がうそぶく。
「ふふん。しかし、お前の言う通りだ。足利家の御用絵師と呼ぶには、もう少し狩野に仕事を頼まねばならんな」
公方さまは、形のいいあごをなでた。
「決めた。源四郎。屏風を描け」
「はあ？」
源四郎が間の抜けた返事をする横で、俺は背筋を伸ばした。将軍直々の仕事の依頼。俺なんかがこんな場に立ちあえることなんて、めったにない。
「そうだな。秋の嵯峨野を描け。今日という日を何度も思い出せるような屏風だ」
「秋の嵯峨野……」
思わず声が出た。
源四郎の筆が、大きな屏風の上を走るさまを想像する。燃えるように色づく山を、激しく流れてゆく川を、静かに佇むたくさんの寺院を、楽しげに人々が行きかう門前町を。
源四郎の筆は、ち密に、でも伸びやかに、「今日」という日を写し取る。
見てみたい。
源四郎が描く、秋の嵯峨野を。
源四郎が俺を見て、無言でうなずいた。
俺も、無言でうなずき返す。
「描きたくなければ、鳥は描かなくてもよいぞ」
ニヤリと笑う公方さまに、
「精進いたします」
俺たちは深く頭をさげた。
「よし、決まった。棗。舞え」
「はい。殿」
棗さんはすっと立ち上がり、座の中央へ進んだ。ご家来衆が鼓を出してくる。ポンポンと優しい音が、秋の嵯峨野を包み込む。その音に合わせて、棗さんがふわりと舞った。
暮れてゆく空の下、しなやかに舞う棗さんは白ユリのようで、俺はいつまでも見とれていた。

《一般部門　最優秀賞》「レッツ・オバンギャルド」

あらすじ

還暦を過ぎた紫香子さんはこれまで自転車に乗ったことがなかったが、単身生活を送る自転車王国・京都で一念発起し自転車教室に通い始める。夫からの経済ＤＶ、娘との関係、実家の家族からの抑圧。様々な問題や過去の重荷を抱える紫香子さんは、異質なものも受け入れる懐の深い京都のまちでの生活や自転車教習を通じて、自分の心の奥底に触れることになる――過去と現在を行き来しながら、やがて他の誰でもない自分自身を取り戻し、本当の自由を手に入れて未来へ漕ぎ出す女性を描く物語。

作者プロフィール

万願寺マサ子（まんがんじまさこ）＝ペンネーム＝

一九六一年生まれ。京都市在住。

上智大学文学部卒業。

受賞コメント

知りたいことがある。追求したいことがある。やむにやまれぬ思いから、執筆にとりかかった作品でした。どこに行き着くかは分からないけれど、考えながら、いえ、考えるために書くというやり方で。

材料は、あっちこっちから借りてきました。けれども事実そのものを、書いたつもりはありません。私が書きたかったのは、真実であって事実ではない。はたして成功したでしょうか。甚だ心もとないけれど、それでもし、読んでいただける機会が訪れたなら、ことに今、学校や家庭や社会の中で、立ちすくんでいるあなたに訪れたなら、どうかオバンギャルドな風が、あなたの胸にも吹きますように。

この地で出会えたあの人この人、拙作に光を当てて下さった審査員の皆様、ありがとうございました。

作品の一部抜粋

「はいっ、そこで左足もペダルに乗せて！」

開始後四十分がたっていた。いつの間にかレッスンは進み、紫香子さんは自転車と共にコースの上へ出ていた。サドルを目一杯下げてあるとはいえ、またがっているのは通常仕様の二十四インチだ。

右足をペダルの上に乗せ、左足で地面を蹴っていた紫香子さんは、坂上さんのかけ声に、とっさに左足もペダルに乗せた。

後ろからさらに声が飛ぶ。

「背中を丸めないで！ 顔を上げて！」

ふと風を感じた。ぐんぐん景色が迫ってくる。生まれて初めての感覚だ。

あっ。

倒れる、と思ったときには、後ろを走っていた坂上さんの手が伸びて、しっかりと車体を支えてくれた。

息が切れている。顔が熱い。心臓が激しく打っている。

「大丈夫です」

あくまでソフトに、しかし確信に満ちて坂上さんは言った。

「いま、乗れましたね。あとは細かいコツを覚えて、繰り返し練習するだけです」

たとえば、と坂上さんは、コースの端に落ちている枯れ枝を指差した。

「あの枝を避けようと思って枝を見ると、かえってそこへ引き寄せられてしまいます。障害物を避けようと思ったら、そのものを見てはいけません。その先、進みたい方向を見るのです」

「進みたい方を見る……」

紫香子さんは息を整えながら、坂上さんの言葉を繰り返した。

「そうです。つい足元を見がちですが、顔を上げて、先を見ること」

ああっ……。

紫香子さんは思わず震えた。

「自転車に乗るのって、未来を見ることなんですね！」

「なるほど」

表情を変えずに、坂上さんはうなずいた。

「ステキな解釈です」

帰りは西側の道を下っていった。予想通り静かな家並みが続いている。北山通に突き当たると、来たとき下車したバス停よりも、ひとつ西寄りのバス停の方が近く見えた。地図で確認してみると、紫野泉堂町というバス停だった。「紫」の文字に親しみを覚え、ゆるい坂をのぼっていく。交差点の先が千本通、北山通の果てだった。

はるばるやって来たものだ。

紫香子さんは来た道を振り返った。

《一般部門　優秀賞》「波のゆく先」

あらすじ

璃子は小学六年生。自分が生まれる前、心中未遂の末ひとり海で亡くなったという父を思いながら、水泳の練習に精を出す日々を送っている。ある日、璃子のクラスに東京からの転校生・佃くんがやってくる。将来漫画家を目指している佃くんとふとしたきっかけで話すようになった璃子は、これまで誰にも言えなかった父のことを打ち明ける。授業で習った安徳天皇のエピソードと、父の話に着想を得た二人は、様々な思いを胸に「波の下のもうひとつの京都」を主題に漫画を描き始める――各々の異なる寂しさを抱えつつ、挫折を経験しながらも成長してゆく子どもたちの物語。

作者プロフィール

橋爪　志保（はしづめ　しほ）

一九九三年、京都市生まれ。京都市在住。
同志社大学文学部美学芸術学科卒業。
二〇二〇年、第二回笹井宏之賞の永井祐賞受賞。
二〇二一年、歌集『地上絵』（書肆侃侃房）出版。

受賞コメント

生まれてから今までの三十二年間住んだ京都には、溢れるほどの愛憎があります。それは、観光に来た方々が抱く京都を大切に思う感情とは異なっているような気がします。しかし京都は、確かにわたしにとっても大切なのです。登場人物の力を借りて、その思いを全力で表現した結果、このような賞をいただけたことがうれしくてなりません。

この小説の主人公たちは、創作によって各々の内面を見つめ直し、悲しみを癒そうとします。小説を書くわたしも同じことをしていると感じます。しかし、作品を発表することはそれだけにとどまらない、他者の心も動かすことができる行為だとわたしは信じています。

心を動かしてくださった選考委員の皆様、関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

作品の一部抜粋

砂川先生は、今度はみんなに資料集を開かせて、舟に乗って平氏と源氏が戦っている絵について説明しはじめた。平氏が赤い旗で、源氏が白い旗やったのが運動会の紅白の起源やとか、そういうエピソードのあと、先生は眉毛をきゅっと上げて、続けた。追われた平氏側には、安徳天皇という人がおってんな、この人は、壇ノ浦の時点で数えで八歳、実際は六歳くらいの子どもやった。でもかわいそうに、死なあかんことになったんやなあ。海の淵で二位尼に抱きかかえられて、何て言われたと思う、「波の下にも都はございますよ」。そんで、小さな天皇はそのまま、海の中へどぼん、や。

その瞬間、海の冷たさとしぶき、水面に叩きつけられた身体の痛み、水の塩辛さ、皮膚には圧、着物のへばりつく重さ、だだだだとやかましい鼓動、それら何もかもが、わたしにははっきり感じられた。足がつかへんから腕の中でもがく、腕は硬い、口に水ががっぱんがっぱん入ってくる、胸が焼ける、痛い、痛い、痛い、苦しいとも思えない、痛いは怖いってことや、怖い、助けて、でも誰に、喧騒、泣き声、叫び声、もうあかんと言った、誰もこの腕から逃れる方法を知らん、でも、そう近くないうちに、身体からはゆっくり力が抜けていって、波の動きに預けられながら、顔を下にして沈んでいく。

隣の席の西村くんが「並野の下あ?」とわたしの苗字にあわせて冗談を言ったみたいやったけど、全然うまく笑われへん。全身が引きつるような感覚で、心臓の存在感。んが、と自分の口から変な声が漏れそうになった瞬間、チャイムが鳴った。

お、終わりや、続きはまた明日やな、ってちゃうわ明後日やな社会は。砂川先生の声で我に返ると、教室は教科書をたたむ音、鉛筆を筆箱にしまう音、椅子を引く音で満たされる。息を吸って吐く、吸って吐く、吸って吐くを意識して繰り返してたら、唾が気管に入って盛大にむせる。咳をしたら、口は空気をまた吸って吐いて、わたしは「あんとく天のう」とだけノートの隅に走り書いて、はたくように閉じ、下敷きを挟んだまま机の下にねじりこんだ。

水曜日は五時間目までしかないので、授業はそのまま帰りの会に移行した。でも、苛立ちのような焦りのような感情はまだ続いてて、日直の沢井くんの声はよう耳に入ってこおへん。沢井くんが一日の報告を終えると、今度は砂川先生が話す番。先生は、ぱんぱんと手を打って教室の私語を完全に消してから、大事なお知らせです、ともったいぶった。えー、実はなんと、来週からこのクラスに転校生が来ます。

ええええ、と教室が沸き立った。転校生、転校、とみんなが口々にざわめく。わたしもこの大ニュースにはさすがに驚いて、今日はなんやどきどきすることがぎょうさんある。

《中高生部門　最優秀賞》「みーちゃんのメガネ」

あらすじ

小学二年生のみーちゃんは常にメガネをかけているが、あることをきっかけに違和感を覚えてメガネを外してしまう。その日の夕方、いつものように堀川五条の歩道橋から交差点を見下ろすと、そこには赤い服を着た、たくさんの「人」が動き回っていた――メガネを外すことで見えた世界、メガネをかけることで見えていたものが見えなくなった実体験を経て、大人びた子供のみーちゃんが成長する姿を描いた物語。

作者プロフィール

山本　千遥（やまもと　ちはる）

京都市在住。
高槻高等学校二年。
二〇二四年、第二回京都キタ短編文学賞ジュニア部門最優秀賞受賞。

受賞コメント

どんな物語を書こうかと考えていた時、脳裏に浮かんだのは少し前に見た新聞の記事でした。「大人」に区分されることがあれば、「子供」に区分されることもある。その不安定な感覚を小学二年生の女の子だったらどのように受け止めるのだろうと想像して書きました。

舞台は京都ですが、有名な観光地や寺社が登場しなくても、書いているうちに自然と物語の世界が広がっていきました。それだけ、京都という土地には隅々まで人を惹きつける不思議な力が宿っているのだと改めて感じました。

私の大好きな京都が題材の小説で賞を頂けたことを大変嬉しく思います。選考・運営に関わってくださった全ての方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

作品の一部抜粋

みーちゃんは家に着くと、鏡の前に直行した。お風呂に入る時以外でメガネを外して鏡を見るのは久しぶりだ。子供の遠視の場合、ずっとメガネをかけていたら、中学生くらいには外せるようになることが多いと聞いていたからだ。

――これが本当のみーちゃんなのか。メガネなしで見た自分の姿は、やはりちょっとだけぼやけている。試しにメガネをかけてみると、いつものみーちゃんに戻っていた。鏡の自分と目を合わせ、そこではっとした。目が、なんだか変だ。メガネをつける前と後で大きさが全然違う。小さなレンズに溢れんばかりの大きな目。虫眼鏡で拡大されたかのようで、これじゃあまるで人間じゃない。

そんなことでメソメソするみーちゃんじゃない。そう言い聞かせてはみたものの、なんとなく悲しくなった。メガネはピンクのケースにしまい込んで宿題に取りかかった。

計算のドリルをしていても、漢字の勉強をしていても、メガネを外した影響はあまりなかった。滞りなく宿題を済ませ、五時からは水泳教室に行く。時間ぴったりに近所の友達のなっちゃんが家に来てくれて、それから一緒に歩いて壬生のプールに向かうのだ。帰りはママが迎えにくる。

今日もなっちゃんは「こっんにっちは」と元気よく挨拶をして、みーちゃんの家を訪ねてきた。

「ちょっと待ってて。今行くし」

メガネをかけて行こうか迷ったが、置いていくことにした。なっちゃんがいるなら大丈夫だ。

外に出ると、もう日は暮れかけていた。西の空は今度こそ真っ赤に染まっている。車のライトもちらほらと光り始めていた。

水泳教室までの道中でなっちゃんと話すことは大抵決まっている。一番多いのは、最近報じられているニュースに関してだ。ここ何週間か続けて、闇バイトについて語り合っている。詐欺の受け子から強盗殺人まで。どうしてそんなことが起きるのか。そしてどうしたら防げるのか。二人とも主な情報源は京都新聞だから、話も合う。大人なみーちゃんにとっては完璧な話し相手だ。

熱心に話し込んでいると、いつの間にか堀川五条の歩道橋の上まで来ていた。巨大なその交差点をチラリと見下ろす。ここでは夜になるといつも、車の赤いランプが潮の流れのように動き回るのだ。信号の指示に従って、車が規則正しく流れていく様子はサーカスみたいで、みーちゃんは結構気に入っている。

今日もその姿を一目見ようと思ったのだが、みーちゃんはあれ？　と首を傾げた。確かに、広い道に赤いものが流れているのは変わらない。しかし、それは「もの」ではないように見えた。これはきっと「人」だ。そう、赤い服を着ている「人」なのだ。歩道橋で囲まれた四角い枠の中は夕方なのに煌々と光っている。その中をたくさんの人がうじゃうじゃと動き回っていた。

《中高生部門　優秀賞》　「十年で二日の修学旅行」

あらすじ

新人の中学校教諭の晶子は修学旅行の引率で京都を訪れる。晶子にとって十年ぶりの京都は大切な場所であり、忘れられない記憶がとどまる場所だった。今を明るく前向きに生きる生徒の高野に過去の自分を見た晶子の、もう一つの時間が動き出す――十年前の修学旅行で起こったある出来事を受け入れ、次の一歩を踏み出すまでの晶子の再生を描いた物語。

作者プロフィール

齋藤　琉晴（さいとう　りゅうせい）

埼玉県在住。

埼玉県立川口東高等学校二年。

受賞コメント

この度は、優秀賞に推薦いただきありがとうございます。

思い入れのある京都を舞台に学生としての記憶を作品に残せたことを光栄に思います。私自身、京都に初めて降り立ったのは、晶子と同じ中学三年の修学旅行でした。生憎の天気で、清水寺から絶景を望むことはできませんでしたが、間違いなく青春の一ページに刻まれています。

京都文学賞の募集を見かけた時は直感的にこれだ、と思ったのを覚えています。その直感が当たったのか、それとも運命の悪戯か。いずれにせよ、私の人生にとって大きな転機となり、先の未来にも残る記憶になったことと思います。

日本語という美しい言葉を大切に、一人でも多くの人にその美しさを伝えるためこれからを頑張っていきます。

数ある中から選んでいただき本当にありがとうございました。

作品の一部抜粋

「文句言ってたら降り遅れるよ」

「はいはい」

痛く刺さる視線を無視して私は自分の席に戻った。新幹線は静かにスピードを落とし、京都駅に入っていった。僅かに見えた京都の街並みを駅の壁が奪い去り、京都という駅名表示が現れた。新幹線は完全に停車して扉が開かれた。京都の空気と東京の空気とが混ざり、それが助長してか生徒たちはさっきよりも勢いがある。流れるようにホームに降りた。生徒の川が階段に流れ、そのまま改札口へと向かった。

十年ぶりに見る京都駅だった。何もかも変わっていた。私の知っている京都ではない。一人だけ残された気分だった。足取りが鈍く、気が重い。コンコースまでの道のりで何度か躓いた。その度に生徒が笑い、その度に私の気持ちも軽くなった。温かな笑いだった。おおかた、新人の私が緊張してると思っているのだろう。

「先生緊張してる？」

さっきの仕返しをするように高野さんは上目遣いをした。

「高野さんは私をからかってる？」

「もう、先生そんなこと言わないの。先生の心配してるんだから」

高野さんはスカートの埃を払ってちょこちょこと後ろをついて歩いた。

「高野さん、私は大丈夫。緊張なんてしてないし、ただちょっと考え事をしてたの」

私は淡々と言った。

「考え事？　そっか……」

それから高野さんは黙った。バツが悪くなって、

「高野さん」と、声をかけた。すると高野さんは目を丸くして擦り寄った。

「なに！」

「心配してくれてありがとう」

「いいよ！　あたし先生のこと好きだもん」

不意にかけられた言葉に、私はまた躓いた。そしてまた、高野さんが笑った。小声で「可愛い」と呟いて、それきり何も言わなかった。

私が公立中学校の教師になったのは今年の四月。出身校に赴任して最初の学年が三年だった。無論、担任ではなく副担任だが、未経験の私にとっては大変な大仕事だった。提出物の管理、クラスの運営、学校行事、日々の授業。だが、弱音を吐かずにやって来られたのは修学旅行先が京都だったから。京都が好きとかそういうことではない。京都は私にとって大事な場所だ。一年目から修学旅行を経験するとは思わなかったが、結果的には良かった。京都が待っていると思えば仕事など苦ではなかった。

私の修学旅行は未だ終わらず続いている。それを終わらす為に私は教師になった。そして今日ここにいる。

とん、と胸を叩いた。私は前を向いた。

《海外部門　最優秀賞》　「そしてまた続く」

あらすじ

ドイツ出身の私は二十年前から京都に住んでいるが、愛着を感じている京都に大量の外国人観光客が押し寄せ、居心地のよい場所が次々に奪われていくことに苛立ちを募らせている。そんなある日、幼少期から苦手としている老婦人が来日し、葛藤しながらも京都案内を引き受けた私は、押し寄せる様々な感情と〝対話〟することになり――河童の空想に囚われている私が老婦人との対話を契機として、自分自身の人生を内省的に綴る私小説。

作者プロフィール

ステッグミューラー　アヒム

一九七七年、ドイツ生まれ。ライプツィヒのドイツ文学研究所で学び、テュービンゲン大学、同志社大学、関西外国語大学で日本学を専攻。現在、立命館大学でドイツ語講師として勤務。京都市在住。

二〇二四年、京都文学賞海外部門優秀賞受賞。ドイツ語でも執筆活動を行っており、二〇一〇年、エルゼラスカ＝シューラー戯曲賞、二〇二三年、シュヴァーベン文学賞受賞。

二〇二六年三月には、日本の大学で開催されるドイツ農民戦争に関するシンポジウムの計画を描いた小説『Der Prozess der Modernisierung（近代化の過程）』がドイツで出版予定。

受賞コメント

二〇〇〇年頃、ライプツィヒの古書店で働いていた友人が、日本文学の翻訳本を贈ってくれました。私はその本に夢中になりました。川端康成の『古都』や三島由紀夫の『金閣寺』も収められていて、どれも難解でしたが、遠い国をもっと知りたい、いつか原書で読みたいという憧れが芽生えました。それ以来、さまざまなことがありましたが、京都で過ごした年月のなかで、私はよく散歩をし、頭の中で周囲の環境と対話を重ねるうちに、自然と日本語で書きたいという願望が生まれたように思います。

京都文学賞は、自分の言葉を探している人々に場を提供するという点でも、改めて非常に意義深いものだと感じています。この機会がなければ、これらの文章は夢のように頭の中だけに留まり、存在し、形になることはなかったかもしれません。

作品の一部抜粋

私はいつも家でお風呂に入ることにこだわっていたわけではない。一時期、温泉に行くのが好きだった。マティアスと私は長いハイキングに出かけ、その途中で休憩をとり、温泉でリラックスした。二十年前はそれでも楽しかったし、コロナが大流行したときでさえ、私は銭湯や温泉で過ごすのが大好きだった。しかし、観光客が増えれば増えるほど、こうした安らぎとくつろぎの場は私にとって台無しになっていった。鞍馬でのハイキング中、イギリスの少年サッカーチームが私たちの平和な入浴体験を台無しにした。その後、すべてがどんどん悪くなっていった。小さな浴槽で出会う、さまざまな国のさまざまな男たちが増えていった。体を洗うときも、入浴後も、私はいつも日本人男性にとても心地よさを感じていた。しかし、どんどん日本人男性が温泉から消えていった。狭い浴槽の中でさまざまな国の男たちが戯れれば戯れるほど、私の不安は大きくなっていった。それは衛生面の疑問から始まり、大声の騒音や空間の欠如にまで及んだ。浴室ではもはや空間や自然とのつながりを感じることはなく、イワシの漬物の缶詰の中にいるような気分だった。全員がイワシだったら幸せだっただろうが、私はいろんな種類の魚が入っている缶の中にいるような気がした。イワシの次はサバ、その次は鯛。耐えられない。湯の効能を期待して温泉にも行ったが、今では周囲に湯はほとんどなく、違う男の肌があるだけという印象を受けることもある。外国人客に母国の入浴文化を紹介する日本人男性を時々見かけた。リラクゼーションルームで彼らの会話をこっそり聞いていると、いかに温泉が疲れるか、いかに悪いものかということがわかった。かつて温泉は瞑想の場であり、安らぎとくつろぎの場であった。日本人は礼儀正しいが、自分たちの文化を外国人に譲ってしまったのだ。私ももうそこには行きたくなかった。しばらくの間、銭湯やスパにも行ってみたが、やはりダメだった。

朝日を浴びて目を覚ますと、バルコニーに出て、向かいのホテルの生い茂った屋上の庭からスズメが飛び上がるのを眺める。まるで大地から空へと移動する雨のように爽やかだ。そして灰色の傾斜屋根の上に落ち着く。この時間はまだ静かだが、あとで無精ひげの老人が餌をやると、さえずり始める。

ドイツのカフェテラスに座ると、いつもスズメがそばにいる。ドイツでは、まずスズメが来て、次にウェイトレスが来る。私がとっくに支払いを済ませ、店員から冷たい視線を向けられるようになっても、スズメは私を温かく包んでくれる。スズメはいつもタイミングを見計らってやってきて、去っていく。

私はよく京都のいくつかの場所が混雑していることに文句を言う。一人でいることに耐えられない時もある。今日、この土曜日にこの八階建てのアパートにいると、私はここに一人でいるような気がする。私だけがこの小さなアパートに取り残されてしまったようだ。このビルの周りの家々には誰もいないし、通りさえも静かだ。警察のサイレンも救急車のサイレンもない。奇跡的な理由で、病気になったり、法を犯したりする人がいなくなった。スズメの絶え間ないさえずりだけが私を支え、孤独から遠ざけてくれる。私はスズメの群れに感謝している。

《海外部門　優秀賞》　「この花、ここで咲くわけでは」

あらすじ

行きつけの立ち飲み屋でお酒を飲みながら煙草を吸う常連のムーさんに私は想いを寄せているが、彼を遠くから眺めるだけで何も行動を起こせずにいる。ある日、「店内禁煙」を予告する貼り紙を目にした私は動揺するが、今後も店に通うのか、ムーさんに聞くことができない。そんな中、常連客同士で二軒目に繰り出した後、流れでムーさんが私の家に泊まることになり――居酒屋の喧騒とは対照的な、切実で密かな想いを抱える大人の女性の心の機微を丁寧に綴った恋愛小説。

作者プロフィール

参朗（さんろう）＝ペンネーム＝

一九九四年、台湾生まれ。京都市在住。
台湾の大学のデザイン学科卒業。
現在、ＩＴ企業の会社員。

受賞コメント

祝福されて喜んだ方がいいと思う時、上手く喜びを感じられない場合、みなさんはどうなさるのでしょうか。

日常生活中、人間として真価が問われる時はいつも予測されていない時にやって来ます。どんな選択をしたとしても、どんな反応を取られても、その一瞬一瞬の感情の綾を掬い取るのが僕にとって生活上、もしくは人生に於いて一番魅力的な部分であります。

初めて自分の文章を人に読んでいただくだけで、とっても嬉しくて素晴らしいことを体験させていただきました。この度、賞を頂くことに対しては、文字通りに恐縮しか思いませんでした。

僕の場合は、急遽仕事のお休みを取って、部屋を掃除したり、本を読んだり、気に入ったお菓子を頂いたりして、とにかく自分が喜ぶことをしてみました。感情の移りは上手くいったかどうかわからないが、善処してみました。

みなさんは、どうなさるでしょうか？

作品の一部抜粋

よく一人で黙々とお酒を飲む印象があるが、彼は決して他人からの視線や感情の流れを見逃すわけはないと私は思う。

そんな彼を眺めながら、目の前のアジフライと白ラムのロックを一口し、疑問符がまた心の中で浮かんできた。

自分の感情に何回も疑う思いを起こしていった。自分はムーさんに対してどんな想いを抱えているのか、何回も整理してみたが、うまく結論にたどり着くことは一回もなかった。

何か月か前から、彼に対して特別な想いを抱いていることに気づいた自分がいて、まだ素直に認めることをしたくないため、いろんな言い訳もしてみた。その都度、彼を観察することしかできなかった。

まるで煙草を吸うために頑張ってこの世に生きている彼は、常に空気の流れを鑑みて、よく他の客の話題に合わせて笑みを浮かべる。でも、あの笑みが瞳まで届くことは一度もなかった。

適切に話題を振り出す彼はみんながトークを広げていくうち、出しゃばりすぎずに会話の輪から距離を取って、にっこりと片方の口角しか上がらない微笑みを保ちながら聞き手になる。人の良さをちゃんと言葉にして褒めるが、心構えが客観的すぎることもしみじみ感じられる。

何かの結論を出そうとはしないが、こういう自分を説得するような見直しは何回も繰り返してやっていたが、彼への想いは納得も諦めも、どっちにも着地できない。

そもそも彼の名前でさえも知らない。ム音から始まる苗字はいっぱいあるし、名前の略称の可能性もある。外見から見ると私より上であって、三十代後半ぐらいだが、雰囲気的にはもっと上な気がする。

隣で一緒に飲んで、話す機会は何回もあったのに、何故かこういう挨拶程度な質問を聞けない自分がいる。時間が経てば経つほど、より聞けなくなる。

もう高校生じゃあるまいし、神秘感のある人に惹かれて、恋と勘違いするか。でも、この感情は確かに青春時代の自分に戻ったかのように、この状態を好んで、離さずに近寄られず、明白でも遠くてわからずでも、曖昧でもない。ずっと酩酊状態のような、ぐちゃぐちゃになっている脳に浸り、想像を酒乱と化して自由に膨らませることで満足する自分がいる。

少しずつ、常連たちの会話から掬い上げた情報は、私が知った彼の全てである。想像だけは時間の推移によって増していき、彼への想像を私が知ったムーさんと照らし合わせて、自分の中で彼の全像を彫り出す。たとえそれが本当の彼ではないとしても、楽しんだ。

だから私は敢えて聞かない。

やがて、稀に入って来る新規客は煙に耐えられず、さっさと冷めたおかずを片付けて、暗闇へ逃げ込んでいった。

ムーさんの卓上の灰皿は裁縫用の針刺しみたいに煙草の残骸が刺し込まれて、ある意味で現代装飾芸術のような状態になっているとしても、早くも去っていた女性客の嫌がる目配りにまるで何も察していない様子で、また一本をふかした。